

## 学位申請論文の要旨

日本社会は未曾有の高齢化が進む一方、身体的、心理的に幸福とはいえない高齢者が増える「長寿のジレンマ」状況にあり、これをいかに解決するかが重要な課題となっている。

従来の高齢者研究は、若さや生産性、多様な人間関係などを重視する物質的・合理的な幸福の捉え方を前提としてきたが、必ずしもそれが幸福の普遍的なあり方ではない。高齢期における幸福はそれまでの時期と質的に異なる特性を有するものとして、神秘的・超越的な幸福の捉え方を主張する「老年的超越」概念が提唱されてきた。この概念が日本の高齢者・超高齢者にも適用できるのか、そして東洋的な老いに対する態度といった日本的な特徴がどのように影響するのかを明らかにすることが本研究の目的である。

本論文は、序章を含め第1章～第6章で構成されている。第1章～第3章は文献検討、第4章・第5章は実証研究、第6章は総合的考察である。各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、Tornstam(2005)の“Gerotranscendence : A Developmental Theory of Positive Aging”に基づき、老年的超越理論の起源や枠組み、測定尺度、関連要因についてまとめるとともに、この理論を日本人に適用するにあたっての問題点や留意点を整理している。

第2章では、日本の老年的超越研究（質的研究および量的研究）についてまとめるとともに、現時点での研究の到達点と本研究に向けた課題を整理している。日本人高齢者を対象にした老年的超越の尺度としては、現時点では日本版老年的超越質問紙改訂版（JGS-R）の8次元尺度が最も妥当なものと考えられること、日本における実証研究においても Tornstam の考えを支持する結果が得られていることを確認している。

第3章では、東洋思想に関連する膨大な文献の中から、実証研究で利用する概念を構成するために必要な情報収集に適した文献を選定し、“東洋的なもの”の構成要素を抽出し、「老いに対する東洋的な態度」という構成概念に統合することを試みている。そして、これに基づき、質問紙調査やインタビュー調査で使用する設問のワーディングを行っている。

第4章の量的研究は、第3章で準備された東洋的な見方（老いに対する東洋的な態度）を含む質問紙調査を用いて得られた、高齢者の量的データ（有効251人）に基づき関連要因分析を行っている。共分散構造モデルによる多母集団同時解析の結果、「老年的超越」に影響を及ぼす要因について、男性では、直接的に影響を及ぼすのは「主観的幸福感」「東洋的な見方」であり、間接的には「年齢」「人生の危機」「活動性」「暮らし向き」であることが示された。女性では、直接的に影響を及ぼすのは「年齢」「主観的幸福感」「東洋的な見方」であり、間接的には「暮らし向き」であった。

また、「主観的幸福感」と「東洋的な見方」を変数とするクラスター分析の結果、調査対象者（237人）は、以下の3つのクラスター（CL）に分割され、クラスターごとに「老年的超越」との関連を分析し以下の結果を得ている。

CL 1 (低 SWB・低東洋的な見方群) : 「老年的超越」には懐疑的（否定的）な群（81人）

CL 2 (中 SWB・高東洋的な見方群) : 「老年的超越」を肯定的に捉えている群（79人）

CL 3 (高 SWB・低東洋的な見方群) : 「老年的超越」に懐疑的（否定的）な群（77人）

①「東洋的な見方」は、「老年的超越」に強い影響（高める）を及ぼす要因である。

②「主観的幸福感」が低い場合は、「老年的超越」も低い。しかし、「主観的幸福感」が高いからといって「老年的超越」が高くなるということはなく、むしろ「主観的幸福感」が中庸のレベルにある場合に「老年的超越」を高める傾向があることが認められた。

第5章の質的研究は、後期・超高齢者17人へのインタビュー結果のコード・マトリックス分析である。インタビューを行った後期・超高齢者17人の「語り」から、先行研究で日本人には明確に現れないとされていた「宇宙的次元」に通じる内容が多く抽出された。また、質的データのコード分析を行い、「関係・バランス志向的幸福」「東洋の見方」「文化的・社会的要素」といったカテゴリーで構成される「概念モデル」が作成された。クラスター2の「主観的幸福感」が中庸のレベルであったことの原因が、このモデルによって説明される。すなわち、個人的な幸福増大を求める欧米型モデルではなく、東洋文化にみられる他者との関係性、バランス志向性を重視する幸福に価値を見いだす傾向が見て取れる。また、この人たちの「老年的超越」の得点がいずれも中位以上となっている点も特徴的であった。

第6章ではこれまでの研究結果を基に総合的考察を行っている。量的研究・質的研究を整理した「概念モデル」において、「関係・バランス志向的幸福」と「東洋の見方」に影響を及ぼす基盤となるのが「文化的・社会的要素」、ここでは「生きた時代(コホート)」であるが、この時代の体験は心の奥深くに「身体化」されているという点で「心のプロセス」(老年的超越)に影響力の強い要因だといえる。「概念モデル」は、量的研究により構造化された関連要因の因果関係や、質的研究で明らかとなった「関係・バランス志向的幸福」と「東洋の見方」の文化的背景や意味内容を説明するものとなっている。

またこの章では、本研究の問題点と今後の課題を三点にまとめている。第一の問題点は、サンプルの特性に関するバイアスである。本研究の調査対象者(質問紙を配布した総数363人)は高齢者大学の受講生が約8割を占め、インタビューを行った75歳以上の高齢者も多くは健康で全体的に生きがい意識の高い層であると推察され、偏ったサンプルであった可能性は否めない。

第二の問題点は、主観的幸福感の測定方法である。本研究は、主観的幸福感の測定には、先行研究との比較の意味もあってPGCモラル・スケールを用いたが、この尺度には、生活満足度尺度(LSIA)のように「認知・長期」的な要素が含まれていない。さらに質問項目では、「老い」を否定的に捉える表現が多く、欧米の価値観(自立心、自尊心などの個人達成志向)が色濃く反映されている印象がある。特に、「老年的超越」と「幸福感」との関連を分析するような場合には、自分の人生を振り返ってこれをどう総括し評価するのか、といった長期的な視点が必要である。老年的超越研究は、同時に「幸福な老い」の研究でもあり、「老年的超越」と「幸福感」との関わりを解明することは極めて重要な研究課題である。インタビュー調査の印象でも、明らかに活動的で幸福感も高いように思われる人の主観的幸福感が相対的に低かったように感じられた。

第三の問題点は、本研究が横断的研究であったことである。量的研究の関連要因分析で「老年的超越」との因果関係が明らかとなった「主観的幸福感」「東洋の見方」および「人生の危機」については、加齢とともに変化する要因である可能性がある。縦断的研究によって、同じ集団での年齢に伴う変化を精査することが今後の課題である。